

平成27年度CJKプロジェクト Bangladesh 派遣 平成28年2月12日～2月23日



目次

概要	1
ミッション・ロゴマークについて	2
メンバー紹介	3
スケジュール	5
ベースラインサーベイ	9
プログラム	
ハウス・トゥ・ハウス	10
ブースデモンストレーション	11
国際交流プログラム	13
シークレット・パル	15
地域清掃	16
エデュケーショナル・ツアー	17
実際に見たバングラデシュ	18
派遣員の感想	
白井 早紀	19
庄司 健	20
助川 菜々子	21
保田 恵里香	22
大竹 敏生	23
仙田 雅大	24
沼上 志帆	25
古川 ゆり	26
溝部 光優	27
神尾 尚	28
派遣団長 所感	29
写真	30

概要

★派遣名称

平成27年度CJKプロジェクト・バングラデシュ派遣

★派遣期間

2016年2月12日(金)～2月23日(火)

★派遣地

バングラデシュ人民共和国:ダッカ管区 シャリアプール(Shariatpur)

★派遣概要

2016年2月12日からの10日間、台湾・日本・韓国(CJK)そしてバングラデシュのスカウト総勢35人が、CJKプロジェクト・バングラデシュ派遣に参加した。今回、日本は幹事国としてローバースカウト10人と指導者1人、事務局1人が、約3か月の準備期間を経て、プロジェクトを展開した。

★経緯・目的

CJKプロジェクト・バングラデシュ派遣は今回で3回目となるが、この派遣の前身は2つの海外派遣であった。それはCJKプロジェクトとアジア太平洋提携プロジェクト(バングラデシュ)派遣である。CJKプロジェクトとは、台湾・日本・韓国の3か国がフィリピンで保健衛生・国際交流を目的としたプロジェクトを展開するもので、過去10回の派遣が実施されている。一方バングラデシュ派遣とは、バングラデシュの農村部の人々に対して、保健衛生・自然環境保護・健康強化を目的とした地域奉仕を行うもので、過去15回の派遣が実施されている。これらの派遣は2012年に節目を持って終了した。

その後2012年11月に行われた第24回アジア太平洋地域スカウト会議で、CJKによる新しいバングラデシュ派遣の合意がなされた。内容はバングラデシュの3か所の地域にそれぞれ2年ずつ、プライマリ・ヘルス・ケアと環境保全をテーマとしたプロジェクトを2014年から6か年計画で展開するものである。本派遣はCJKのスカウトとバングラデシュのスカウトがプロジェクトを実施することで、スカウト同士の友情を促進できる。またイスラームと南アジアの異文化を体験するとともに、国際理解とスカウト運動の理解を深められる。

ミッション

私たちはミッションをこのように決めた。

みんなで助け合う

お互いの文化を知り、日本を伝える

責任を果たして成長する

挑戦し、よりよくする

★ミッションとは...

意見が対立した時や道に迷った時などに初心に立ち戻るための決めごとである。

自分たちがこのプロジェクトをどのようなものへと仕上げるのか、どのような成功を思い描いていたのか思い出させるものだ。

ここに自分たちがこのプロジェクトに求めるもの、期待するものがつまっている。

さらにミッションの文からみんな、お、せ、ち、をつかって今回の『平成27年度CJKプロジェクト・バングラデシュ派遣』の愛称を『みんなのおせちプロジェクト』とした。

ロゴマーク

ロゴマークのデザインはクルー間で話し合っただけ決めたミッションの「みんなのおせち」を一番のモチーフとして、中央におせちを配置した。おせちの具材は黒豆、数の子、田づくり、叩き牛蒡と、この具材がなければおせちが完成されないとされる祝い肴三種に、日本の国花やシンボルとしても愛される菊をかたどる菊花かぶを具材にしている。なお、祝い肴三種は関東と関西で違いがあるが、これらを両方入れることでクルーが様々な出身であることと文化の尊重の意味を込めた。

おせちのお重は日本らしさを考え、波と日の丸イメージであり、おせちの手前の周りの花々は左から台湾(梅)、日本(桜)、韓国(ムクゲ)、バングラデシュ(睡蓮)と、CJKBの順に各国の国花を並べ、4カ国の連携を表した。



メンバー紹介



東京連盟日野第4団
クルーリーダー
白井早紀(Saki)



岩手連盟盛岡第5団
渉外担当
庄司健(Turkish)



茨城県連盟日立第5団
記録担当
助川菜々子(Nanako)

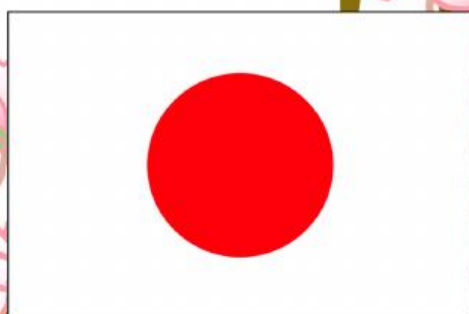


栃木県連盟宇都宮第15団
装備担当
保田恵里香(Erika)



長野県連盟松本第6団
派遣団長
青木秀樹

日本
JAPAN



所属
役職
名前(ニックネーム)



埼玉県連盟さいたま第8団
会計担当
大竹敏生(Take)



日本連盟事務局
大高駿



東京連盟中野第8団
広報担当
沼上志帆(Shiho)



山口県連盟岩国第1団
生活担当
神尾尚(Hisashi)



岡山連盟岡山第17団
プログラム担当
溝部光優(Meebe)



鳥取連盟鳥取第11団
レクリエーション担当
古川ゆり(Yuri)



東京連盟東村山第6団
プログラム担当
仙田雅大(Semple)

韓国 KOREA  名前(ニックネーム)



Ji Min Park
(Jimmy)



Hyun Woo Yang
(Elly)



Bo Yeon Cho
(Catherin)



Seo Hyun Oh
(Linda)



Yun Kwan Kim
(Kwan)



Chang Gyun Kim
(Chan)



Min Soo Kim
(Minsu)



Hyun Woo Nam
(Nam)

台湾 TAIWAN 



Pei-Chun Shih
(Becky)



Yu-Jyun Du
(DU du)



Hsing-Kuei Huang
(Yellow star)



Hsiang-Hao Lu
(Hao)

バングラデシュ BANGLADESH 



Md Salimur Rahman
(Salimur)



Tania Akter
(Tania)



Raihan Sagar
(Raihan)



Nusrat Jahan Rani
(Rani)



Munim Chowdhury
(Munim)



Khan Mohammad Arif
(Arif)



Al Mamun
(Mamun)



Nazmeen Akter
(Nazmeen)



Unmun Maria Usha
(Usha)



ImranHasan Shaikat
(Imran)



Sumaiya Ahammed Abonty
(Abonty)

スケジュール

時刻は現地時間で表記

時間	項目	詳細
2月12日(金曜日)		
20:30	ボーイスカウト会館出発	日本連盟事務局職員に見送られながらバスで羽田空港へ
21:10	羽田空港到着	諸手続きの後搭乗開始まで待機

2月13日(土曜日)		
00:20	羽田空港出発	定刻通りタイ航空にて出発
04:50	バンコク国際空港到着	仮眠、休憩、朝食
11:05	バンコク国際空港出発	定刻通りタイ航空にて出発
12:40	ダッカ国際空港到着	簡素な空港だが入国審査にかなりの時間を要した 各自換金の金額が少額のために難航した
14:30	空港からホテルへ移動	ワゴン車2台にて移動、大渋滞を体験する
16:50	ホテル到着	ホテル・オーネート (Hotel Ornate)
19:30	夕食	CJKが初顔合わせを行いレストランで夕食 各国が「ご飯の歌」で食べ始める その後クルーリーダーミーティング・クルー共有

2月14日(日曜日)		
07:00	荷物積み込み	トラックに個人装備など荷物を積み込み、CJKはマイクロバスに乗車
07:30	出発	予定時刻より遅くホテルを出発
08:50	フェリー出港	マイクロバスに乗車したままフェリーへ乗船 各国のゲーム、朝食などで過ごす
10:30	フェリー入港	港も大渋滞
12:00	シャリアプール・ジャジーラの拠点 (以下拠点とする)到着	バス降車から花で出迎え、軽食並びに休憩、部屋割り
14:00	昼食	セルフサービス形式の食事
16:00	オリエンテーション	4か国連盟の派遣団が一堂に会し、アイスプレイングとオリエンテーションが行われた
17:30	休憩	歓迎夕食会まで休憩
19:10	歓迎夕食会	来賓挨拶、参加者自己紹介
	終了	その後クルーリーダーミーティング・クルー共有

2月15日(月曜日)		
08:00	朝食	ご飯の歌
09:20	プログラムエリア視察へ出発	マイクロバスにて拠点を出発
09:50	プログラムエリア視察	国際班に分かれてのエリア視察
10:30	視察地出発	再び集合して帰路へ
11:00	拠点到着	すぐに次のプログラムの準備へ
11:15	ベンガル語講座	翌日からのハウストゥハウスキャンペーンのために国際班毎にベンガル語での文章を教わり、練習
12:30	ベンガル語講座終了	終了後は国際班で親睦を深めていた
13:00	昼食	その後休憩
14:40	オープニングセレモニーへ出発	マイクロバスに乗車し、オープニングセレモニー開催地まで移動
15:00	到着、待機	会場まで花道を用意され、盛大な歓迎を受ける
15:40	オープニングセレモニー	学校の敷地内に張られた巨大な天幕の下で行われた 各国連盟スピーチの日本代表として仙田がスピーチをした。 歌やダンス、マジックなど催し物もあった。
18:50	現地出発	時間がかかり押したため、催し物の途中で退席
19:20	拠点到着	夕食準備完了まで待機
19:50	夕食	時間が限られた中で台湾は準備していた
20:30	台湾ナイト	ダンスやゲームが豊富でとても盛り上がっていた
22:40	台湾ナイト終了	一旦部屋へ戻るが、袋詰め作業のためホールへ向かう
22:50	ハウストゥハウスキャンペーン配布贈り物袋詰め作業	サンダルや歯ブラシ、石鹸などを袋に詰める作業を全員で協力して実施(TOYOTA方式と称された分業ラインでの流れ作業)
23:30	終了	その後クルーリーダーミーティング・クルー共有

時間	項目	詳細
2月16日(火曜日)		
07:00	朝礼	台湾スタイルでの朝礼とモーニングゲーム
07:30	朝食	ご飯の歌
08:50	ハウストウハウスキャンペーンへ 出発	マイクロバスに乗りし拠点を出発
09:20	現地到着	プログラムエリアに到着後、国際班に分かれる
09:30	ハウストウハウスキャンペーン開 始	国際班毎の担当エリアに分かれ、練習したベンガル語を使い、贈り物を渡した。
12:40	終了、現地出発	終了時間にばらつきがあり、約40分遅れて出発
13:05	拠点到着	すぐに昼食へ
13:10	昼食、休憩	昼食後は交流、仮眠等
15:40	地域清掃プログラム 焼却炉作成	拠点周辺を国際班に分かれゴミ拾い 焼却炉作成は時間切れにより作成まで至らず
17:30	終了、国旗降納	国旗降納者が一足早く降納
17:40	ジャパンナイト準備	日本派遣団総出で準備
19:20	夕食	ジャパンナイトのためすぐに済ませた
20:15	ジャパンナイト	直前に来賓紹介等を振られ、何とか対応 日本独特の雰囲気盛り上がった
22:20	終了、片付け	その後クルーリーダーミーティング・クルー共有

2月17日(水曜日)		
07:00	朝礼	ジャパンスタイルでの朝礼とモーニングゲーム
07:30	朝食	ご飯の歌
08:20	拠点出発	国際班で各車両に分乗し、プログラムエリアへ
08:50	ハウストウハウスキャンペーン開 始	2日目はそれぞれ国際班で分担された残りの家庭を回った
12:20	終了、現地出発	前回よりも終了までの時間が短縮
12:45	拠点到着、昼食、休憩	到着後すぐに昼食、ご飯の歌
15:20	焼却炉作成、ごみ焼却	焼却炉に文字を彫り完成 ごみを燃やして燃焼テストを実施
16:20	終了	徒歩で拠点へ帰還
16:30	ブースデモンストレーション検討 会議	4か国それぞれで概要と必要物品をまとめ、共有
17:30	国旗降納	各国のスタイルで定刻に降納 その後休憩
19:00	夕食	コリアナイトに関連して夕食にプルコギと韓国のり
19:50	コリアナイト	韓国の伝統文化を感じる装飾と出し物であった
21:50	終了	その後クルーリーダーミーティング・クルー共有

2月18日(木曜日)		
07:00	朝礼	コリアスタイルの朝礼とモーニングゲーム
07:30	朝食	ご飯の歌
08:30	拠点出発	プログラムエリアへマイクロバスにて移動
09:10	ブースデモンストレーション	エリア内の学校(教室と屋外テント)にて実施 井戸、トイレの村への引き渡し式
13:40	現地出発	引き渡し式等で時間が押し、予定より遅れて出発
14:00	拠点到着	到着後すぐに昼食へ
14:10	昼食	ご飯の歌
15:00	自由時間	従来予定されていたプログラム(ゲーム)がなくなったために持参したボールでサッカーを楽しんだ者や交流など自由な時間を過ごした者がいた。
17:00	ブースデモンストレーション評価 会(日本独自)	現状や流れを把握できたため、日々の改善として全体で評価を実施
17:30	国旗降納	各国スタイルで実施
17:35	各ブースでの改善作業(日本独自)	全体評価に続いてレクチャー班、カルチャー班に分かれての改善作業
19:00	夕食	ご飯の歌
20:20	バングラデシュナイト	バングラデシュの文化を思う存分感じた
22:35	終了	その後クルーリーダーミーティング・クルー共有

時刻は現地時間で表記

2月19日(金曜日)		
07:00	朝礼	バン格拉デシュスタイルの朝礼とモーニングゲーム
07:30	朝食	ご飯の歌
08:30	拠点出発	マイクロバスに乗り移動
09:10	ブースデモンストレーション	2日目は何も無い平地でタープの下で実施。井戸の落成式
12:50	現地出発	井戸やトイレの説明が長引き定刻より出発が遅れた
13:15	拠点到着	すぐに昼食へ
13:20	昼食、休憩	昼食後休憩
16:30	カルチャープログラム	首相補佐官以下来賓出席のもと、拠点付近の小学校から招待されて参加。CJK女性陣はサリーに着替えるため退席し、そのタイミングで国旗降納(17:30)
18:30	終了	徒歩にて拠点へと戻る
19:00	夕食	ご飯の歌
20:00	インターナショナルナイト	各国が簡単な歌や踊りを披露し、その後はダンスや爆竹など盛り上がり、最後の夜を終えた
21:50	終了	その後クルーリーダーミーティング・クルー共有 00:00と同時に韓国スカウトの誕生日イベント

2月20日(土曜日)		
07:00	朝食	撤収のために早い朝食。その後、身支度。
08:00	撤収	キッチン装備や簡易ベッド等を撤収、トラックへ積み込み
10:20	拠点出発	現地スカウトとの涙のお別れ
14:00	フェリー出港	行きと同様にマイクロバスに乗りそのまま乗船
16:00	フェリー入港	予定より大幅に遅れた
18:00	バン格拉デシュ連盟本部到着	ここに来るまでにバン格拉デシュ連盟の計らいで2回程軽食の提供と休憩をとった
18:20	昼食	バン格拉デシュ連盟本部内にて昼食
19:45	ホテル到着	到着日と同じホテル・オーネート
21:30	夕食	現地のKFCにて夕食
11:30	クルーリーダーミーティングと評価会準備	クルーリーダーミーティングを受けて、翌日の評価会資料をメンバー総出で準備

2月21日(日曜日)		
08:30	朝食	ホテル内のレストランで朝食
09:10	ホテル出発	徒歩にてバン格拉デシュ連盟へと移動
09:20	バン格拉デシュ連盟本部出発	2台のワゴン車にてダッカ大学へと移動
09:40	ダッカ大学着 国際母語デー参加	靴を脱ぎ、手向けの花飾りと横断幕を持って行進 日本人大学生と出会う。日本派遣団のメンバーが取材を受ける
11:20	終了、休憩	いったんホテルへ帰り休憩
12:50	昼食	バン格拉デシュ連盟本部にて昼食
14:00	ホテルへ	スカウトショップで買い物のため財布を取る
14:50	スカウトショップ訪問	各自スカウト用品を購入
16:30	全体評価会	バン格拉デシュ連盟本部4か国スカウトからの発表並びに来賓コメント
17:30	クロージングセレモニー	参加賞と記念品の贈呈
19:10	歓送夕食会	バン格拉デシュ連盟本部にて歌や踊り、豪華な食事
20:40	シークレットパル	毎日実施してきたシークレットパルの相手を発表
22:00	終了	翌日の日程確認。00:00と同時に韓国スカウトの誕生日イベント

2月22日(月曜日)		
08:00	朝食	ホテル内のレストランにて
09:20	ホテル出発	台湾のスカウトとお別れ。韓国派遣団とともに移動
10:30	ダッカ国際空港到着	バン格拉デシュ、韓国のスカウトと最後のお別れ
13:40	ダッカ国際空港出発	国際母語デーで出会った日本人大学生と同じ飛行機
16:00	バンコク国際空港到着	報告書作成に関する打ち合わせののち、夕食
23:15	バンコク国際空港出発	定刻通り出発

2月23日(火曜日)		
06:35	羽田空港到着	定刻通り到着
07:55	羽田空港出発	借り上げのバスで移動
08:40	ボーイスカウト会館到着	事務局の方々のお出迎えて無事帰着

★事前集会の日程

日時・場所	内容	参加者
第1回事前集会 2015年12月12日13:00～12月13日12:00 於:ボーイスカウト会館	<ul style="list-style-type: none"> ・本派遣についての説明 ・過年度派遣員報告 ・クルー内役務とその内容決定 ・日本派遣団ミッション策定 ・派遣団facebookページ立ち上げとガイドライン策定 ・ブースデモンストレーション(カルチャーブース・レクチャーブース)検討 	青木派遣団長、庄司、助川、保田、大竹、沼上、仙田、白井、神尾、泊(過年度派遣員)各スカウト
第1回クルーミーティング 2015年12月27日 10:00～17:00 於:ボーイスカウト会館	<ul style="list-style-type: none"> ・前回の振り返り・確認 ・渉外情報共有 ・派遣に際しての写真管理について ・ジャパンナイト内容検討 ・ブースデモンストレーション内容検討 ・派遣団装備について ・生活について ・換金について ・タスクと次回会議の確認 ・過年度参加者報告 	全派遣員、古田(過年度派遣員)各スカウト
第2回事前集会 2016年1月23日13:00～1月24日12:00 於:ボーイスカウト会館	<ul style="list-style-type: none"> ・渉外情報共有 ・ブースデモンストレーションについて ・ジャパンナイトについて ・購入品について ・記念品について ・派遣団手帳について ・生活について ・広報について ・タスクと次回会議の確認 	青木派遣団長、全派遣員
エコ石鹸試作品作り 2016年2月2日	<ul style="list-style-type: none"> ・エコ石鹸試作、検討 	大竹、仙田、神尾各スカウト
第2回クルーミーティング 2016年2月7日 13:00～17:00 於:中野区桃園地域センター	<ul style="list-style-type: none"> ・渉外情報共有 ・ブースデモンストレーション確定 ・派遣団・個人装備確定 ・派遣団手帳・報告書構成について ・ジャパンナイト確認 ・KYT確認 ・タスクと次回会議の確認 	大竹、沼上、仙田、白井、古川、溝部、神尾(青柳(過年度派遣員)各スカウト
直前準備訓練 2016年2月11日13:00～2月12日16:00 於:ボーイスカウト会館	<ul style="list-style-type: none"> ・渉外情報共有 ・ブースデモンストレーション最終確認 ・ジャパンナイト最終確認・踊り等練習 ・備品印刷・作成作業 ・インターナショナルナイト確定・練習 ・パッキングと計量 ・派遣団手帳配布・報告書構成について ・経費精算・換金について 	鈴木国際委員長、青木派遣団長、全派遣員
派遣員任命式 2016年2月12日 16:00～16:30 於:ボーイスカウト会館	<ul style="list-style-type: none"> ・派遣団ネッカーチーフ・国旗授与 ・鈴木国際委員長よりお言葉 	鈴木国際委員長、近藤国際副委員長、青木派遣団長、全派遣員

★派遣後の日程

日時・場所	内容	参加者
帰国時クルーミーティング 2016年2月23日 9:00～11:00	・備品等返却・整理 ・報告書割り振り ・写真の管理・共有について	青木派遣団長、全派遣員
派遣団解団式 2016年2月23日 11:00～11:10	・派遣団国旗返納 ・片寄国際委員よりお言葉	片寄国際委員、青木派遣団長、全派遣員
各自担当の報告書作成締め切り 2016年3月8日	・報告書案並びに次年度以降引継ぎ資料の提出	作成:日本派遣団全員
事後集会 2016年3月19日	・報告書作成 ・引継ぎ資料作成 ・報告会用スライド作成	青木派遣団長、全派遣員

ベースライン・サーベイ

訪問式聞き取り調査。シャリアプールの村人の生活環境などを調査するものである。

シャリアプールでのプログラム1年目ということでベースライン・サーベイが必要であったが今回はバングラディシュのスカウトが事前に行ってくれたので派遣中に行う必要がなかった。

質問は全部で27問あり506の家族に、家族構成や職業、学校に行っているかなどや食や水、トイレ、ゴミの処理方法などの質問を行っていた。

今回、私たちはこのデータをもとにプログラムの内容を考えることができたので事前に行ってくれて非常に助かった。また、村のことも事前を知ることができた。

プログラム

★ハウス・トゥ・ハウス

私たちは2月16日、17日にシャリアプールの小さな村でハウストゥハウスキャンペーンを行った。このプログラムは過去2回のプロジェクトでも行われていて、村の各家々に回ってサンダル、歯磨き粉、歯ブラシなどを配るプログラムである。私たちは、事前に行われたベンガル語レッスンで習ったベンガル語を用いて、国際班で家々を回った。国際班とは、4か国のスカウトで構成された班だ。各班、2日間で60件程度の家々をまわった。トイレ、井戸がない家もあれば、太陽光発電のある家もあった。バングラデシュのスカウトに話を聞いたところ、火力発電をまかなえるほど燃料がないので太陽光発電を使っている。電力が少ないため、LEDを使うしかないということだった。またトイレ、井戸のない家庭にはトイレ、井戸引換券を渡し、ブースデモンストレーションの行われた日にトイレ、井戸の贈呈も行われた。

さらに、各家庭には牛や鶏、犬を飼っている家庭が多く、日本では見ることのできない光景も目の当たりにした。この地域は、川の近くで2月は水がなく、川の跡だけが残っている景色も見られた。

この村はサンダルを履いていない人が多く、サンダルの贈呈はよかったと思う。

村人の中にはマレーシアやシンガポールに出張に行っているビジネスマンもいた。多少の貧富の差はあるが、いつも笑顔で平和かつのどかな村だった。



★ブースデモンストレーション

ブースデモンストレーションはカルチャーブースとレクチャーブースの2つに分かれている。1日目は学校で2日目は広場で場所で行った。

カルチャーブース

カルチャーブースでは各国がそれぞれの国の文化を現地の村人に紹介した。

台湾:書道

日本:けん玉・投げゴマ

韓国:ダンス(カンナムスタイル)

けん玉の紹介と体験

日本で昔から遊ばれているけん玉の紹介と体験を行った。現地の人たちは、けん玉を見たことのない様子で、非常に興味を持ってくれ多くの人たちがブースに訪れた。時間内に皿に球をのせるのはなかなか難しく子供たちの中には何度も並んでできてくれる子もいるほどでとても人気があった。

投げゴマの紹介と体験

けん玉同様に日本で昔から遊ばれている投げゴマの紹介と体験を行った。現地にも日本のものとは形が異なるが投げゴマがありそれに慣れているのかコマを回すのが上手な子供が比較的多くいた。投げゴマもとても人気があり多くの人を訪れた。

現地の村の人には英語が伝わらないためバングラデシュのスカウトが通訳を担ってくれ問題なくブースを進めることができた。



レクチャーブース

台湾は環境、日本はPHC(プライマリーヘルスケア)、
韓国は栄養について紹介した。

台湾: ろかの方法

日本: 洗濯、ロケットストーブ

韓国: 栄養の大切さ



洗濯(Let's wash)

紙芝居を用いて、米ぬかと重層が原料の
エコ石鹸での洗濯方法を説明した。
エコ石鹸を実際に使った洗濯、エコ石鹸
の作り方を紹介した。

ロケットストーブ

簡単な構造で強い火力を生み出せて、なおかつ
洪水の後でもすぐに火を加えた料理ができる
簡易かまどとして紹介した。

説明だけではわかりづらいため理解しやすい
ように実際に現物をサンプルとして作っておき、
説明の後にもう一つ村人共に作った。



★国際交流プログラム

夕食後に各国が主催するレクリエーションが行われた。時間は2～3時間ほどで各国のスカウトが自国の伝統文化やポップカルチャーを紹介し、互いの国の理解を促進するものとなった。とても楽しく、毎晩盛り上がっていた。

台湾ナイト(2月15日)

台湾スカウトは全員学校の制服を着て、学校の教室を意識した飾りつけで、蒋介石の写真が飾ってあったのが印象的だった。歌、ダンス、ゲームどれもみんなで盛り上がる事が出来るものが多かった。

食事では台湾のお菓子が出された。パイナップルケーキのように有名なものや、ヌードルパウダーなどあまり馴染みがないものまで、たくさんの種類があった。



ジャパン・ナイト(2月16日)

オープニングは「春の海」の音楽が流れる中、白井スカウトが習字で「日本の祭」と書いた。静かな雰囲気が始まった。出し物として、日本の月ごとの行事と各スカウトの出身県を紙芝居で紹介した。月の紹介では2月の節分では豆まきゲーム、6月の運動会ではラジオ体操、12月には年越しそばなど、ゲームや食事などを混ぜながら行った。途中駄菓子を出したがとても好評で「もっと出して欲しい」と言われ嬉しかった。直前に来賓がくる事を知らされたり、そばが予想していた時間までに出来なかったり、トラブルもあったが、みんなで協力して良いジャパン・ナイトにすることができた。



コリア・ナイト(2月17日)

チマ・チョゴリやパジ・チョゴリを着たスカウトがとても華やかだった。韓国伝統の礼から始まった。ゲームによって4カ国混合のグループに分け韓国のサイコロのようなものを使ったすごろくに似たゲームをやった。バリエーション豊富な罰ゲームもあり盛り上がった。

食事は夕食時にプルコギと韓国のりを出してくれた。日本人になじみの深い味でみんな喜んで食べていた。チョコパイやドーナツのようなお菓子もありとてもおいしかった。



バングラデシュ・ナイト(2月18日)

伝統的な服や腰に葉っぱを巻いたものなど日本人には見慣れない衣装だった。サリーを身にまとった女子スカウトがとてもキレイだった。踊りが中心となっていて、事前からかなり練習をしている事がわかる出し物だった。お菓子をチョコレートや飴など私たちが食べ慣れたものや甘くないクレープなど様々な種類があった。ゴミ拾いをしたときに見たことがあるパッケージのものがあつたのでバングラデシュでよく食べられているものなのだと思う。



★シークレット・パル

「シークレットパル」とは、「シークレット＝秘密の」「パル＝友達」という意味の交流を目的とした遊びである。

やり方

- ①自分の名前・国名を紙に書き、折りたたんでひとつの箱に回収
- ②参加者がそれぞれ1枚ずつ名前・国名が書かれた紙を引く
- ③同じ国の紙を引いた場合は引き直し
- ④引いた紙に書かれていた人があなたのシークレットパルとなる
(注意: 自分のシークレットパルは他人に教えない)
- ⑤箱を用意しておき、そこにシークレットパルに宛てた手紙やプレゼントを入れる。
- ⑥毎朝朝礼時に担当者が箱に届いたプレゼントをシークレットパルに渡す。
- ⑦評価会の日などに自分のシークレットパルを明かす

注意点

- ・手紙やプレゼントの投函は毎日ではなく2日に1回でもよい。しかし、毎日あげたほうがシークレットパルは喜ぶので空き時間を見つけ手紙やプレゼントを用意するとよい。
- ・手紙やプレゼントには分かるところに、シークレットパルの名前や国名を記入。ただし自分の名前は書かず伏せておく。

プレゼンとは、置物や笛・帽子など様々で、毎朝が楽しみになるのでぜひ次年度実施することをおすすめする。今回我々は現地で実施することを決めたため、シークレットパル用のプレゼントが限られていた。だから実施することを事前に決めシークレットパル用のプレゼントを多めに日本から持って行った方がいいと思った。



★地域清掃

私たちが利用した宿泊施設の周りを中心、にゴミ拾いを行った。その後、回収したゴミを燃やす焼却炉を近くの学校で作ることとなり、そのお手伝いをした。

翌日完成した焼却炉内に、ゴミを入れて灯油をかけて燃やした。

この活動を通じて、街からゴミが減ることを望む一方で、現状あるゴミをどう効率よく処理するかという課題が浮き彫りになった。



★エデュケーショナルツアー

今回の派遣の中で、最終日のダッカで国際母語デーの式典に参加した。

国際母語デーとは、言語と文化の多様性、多言語の使用、そしてあらゆる母語の尊重の推進を目的として、ユネスコが制定した国際デーのひとつであり、2月21日が国際母語デーとされている。

この歴史的背景は、かつてパキスタンの一部だったバングラデシュの首都ダッカで、ベンガル語を公用語に認めることを求めた学生デモ隊に警官隊が発砲、死者が出たことに起因し、バングラデシュにとって、独立の象徴ともなる出来事で、歴史の重みを再認識するとても重要な日とされている。

デモで亡くなった若者たちへの弔いと、命に代えて母語を守ろうとした歴史を伝えるため、ダッカ大学構内に建てられたショヒド・ミナールと呼ばれる碑に、当日は向かった。ショヒド・ミナールへの献花の様子はバングラデシュのテレビ局を通じて紹介された。

この活動を通じて、母語のありがたみや自国の誇りについて、再確認するよい機会になった。



実際に見たバングラデシュ

★交通量

首都ダッカは車や自転車がとても多い。車は日本でも見かけるものが多いため、車を見ただけでは外国に来たという感覚は持ちにくい。しかし運転の仕方が慣れ親しんだ日本とは大きく異なるため不思議な感覚に陥る。クラクションが鳴り響き、三車線道路に車が五台並び、T字路で誰も引かないため常にスリルを味わうことが出来る。横断歩道を渡ろうとするとあらゆる方向から車が来るため私たち外国人にはタイミングがつかめない。しかしバングラデシュの人間は涼しい顔をして横切っていく。そこに垣間見える秩序はぜひ一度体感してほしい。対照的に主なプログラム地であるシャリアプールでは、車はほとんどなく交通手段は自転車のようだ。



★食事

皆さんはバングラデシュの食事と言えばどんなものを想像するだろうか？

だいたい料理は辛く、日本と同じ赤唐辛子を使った料理が多かった。見た目は辛そうに見えないが食べてみると予想外に辛い物もあった。中でも青唐辛子を使った料理は一段と辛く感じた。

また、イスラム教を主体としているため肉は主に鶏肉で、ヤギの肉も多もあった。他にも見た目が完全から揚げで、中身がカリフラワーだった料理は衝撃的だった。



★水

バングラデシュでは硬水とよばれる水が普通であり、日本の水はカルシウムやマグネシウムの含有量の少ない軟水という点で違いがみられる。また現地の水道水は衛生の観点から避け、現地のミネラルウォーターを飲んでいましたが、当然軟水ではないためデリケートなクルーはお腹を壊している人もいた。



派遣員の感想

東京連盟新多磨地区日野第4団

白井 早紀(クルーリーダー)

私は、CJKプロジェクト・バングラデシュ派遣に今回で2度目の参加になる。前回は初めての海外派遣だったことや、優秀な先輩方に頼り切ってしまったため自分の中で消化不良の状態であった。この2年で様々な経験を積み、今回は悔いのないような派遣にしたいと思い応募した。

初めてのクルーの顔合わせの時、全国各地から優秀な10名が集まり、このプロジェクトを絶対に成功させたいと思った。また、上に立つ者としてメンバーそれぞれの個性を潰さないように引っ張っていくにはどうしたらいいのかと、悩み、考え、相談した。

今回派遣に参加して得たものが2つある。1つは、国際母語デーに参加したことだ。これはバングラデシュ国民にとっては重要な日である。我々はこのイベントに参加するにあたり、このイベントの意味を勉強してから臨んだ。我々は日本語の教育を当たり前のように受けてきたが、母語を大切にしていきたいと思うようになった。このイベントに参加できたことは非常に良い経験となった。2つ目は異文化交流の観点である。毎晩各国のタベが行われ、各国のダンスや食べ物に触れることができ、3ヶ国にとっても興味が湧いてきた。また、プログラムの時間が空くと、けん玉や駒をしたり台湾のスカウトは笛を吹いたり、アイスプレイキングゲームのようなものをたくさんした。拙い英語ながらも交流したことで、より仲良くなれたし異文化を理解できたと思っている。また、バングラデシュの子どもたちの可能性は無限大である。子どもたちは人懐こくて目がキラキラと輝いていた。学校を訪れたときは、教科書を見せてくれた。日本の子どもたちは、屋内でゲームをしたり幼少期から受験戦争の環境にあたりと、ここまでのキラキラとした目・自然な笑顔はあまり見ない。本当に可愛かった。

我々が現地に赴いた時だけいい状態では何の意味もない。我々が帰国した後も今回伝えた(例えば洗濯の仕方やロケットストーブなど)ことを、実際に生活の中に取り入れてよりライフスタイルが快適になったかを見守っていく必要があると考える。

私はこの4月から社会人となる。仕事の中で、日本人だけでなく外国人と接する機会もある。一つの固定観念の中で物事を決めつけるのではなく幅広い視野を持って今回得られたことを社会に還元していきたい。

岩手連盟盛岡第5団

庄司 健(渉外担当)

まずはこの派遣に際して支援やアドバイス、後押しをしてくださった団、県連盟の皆様や日本連盟の皆さま、そして未知の国へとチャレンジすることに賛同してくれた家族、全ての方々に感謝し申し上げる。

「やり切った！」と心から述べられないのが率直な感想である。それは、理想や計画したことを実際に行動したことで準備不足や反省点が多く出てきたからであり、今回の経験を次年度からの派遣と自身における今後の活動へと活かしていくことが大切であると痛感している。

国際協力、イスラーム文化圏での体験そして台湾・日本・韓国・バングラデシュの4か国協働・交流という3つの柱がCJKプロジェクト・バングラデシュ派遣(以下、本派遣とする)に参加する我々に期待されたことだった。その中でも私は、国際協力の部分についてとても強い意志と想い入れをもって本派遣に臨んでいた。なぜならば、1つは本派遣の前身であるバングラデシュ派遣が「経口補水」をテーマとして始まった派遣であること、及び同じく前身であるフィリピンで実施されてきたCJKプロジェクトも国際的協働奉仕活動として地域開発や健康増進を実施してきたという経緯があるからである。次に2つ目としては、国際協力こそが「行くことによって学ぶ」ことを体現できるだろうと考えているからだ。これは、文化や歴史など価値観が異なる者が相手の現状やニーズを把握し、仮説や考察を重ねて自身も知らないことを掘り下げ計画を立て、今回の場合は共通言語である英語を用いてお互いの理解の程度を丁寧に確認しながら実行し、評価反省へとつなげていくプログラムプロセスを本当に意識しながら実践することができたと感じている。そして3つ目の理由は、これから社会に出る身として「Look wider, act local」を常に意識した行動をしようと考えているためだ。いかなる進路に進もうとも、この言葉は常に私を励まし律してくれ、自分の進路を自分で進むための原動力になるだろう。

私は本派遣において他国との情報をやり取りする渉外を務めたこと、そして国際協力プログラムの一環として「ロケットストーブ」の構造と使用するメリットを伝えることの2点を重点的に行った。まず役務の渉外についてだが、「言語」と「非対面コミュニケーション」という2点がとても難しさを感じた点であった。渉外として意思疎通を図る際はすべて英語の文面で行うため、単語1つにとってみても意味合いが異なってくる。加えてテキストベースでの会話は相手への感情や想いが伝えないため、至急知りたい情報を伝える際にはどうしても強い意味合いの単語を使ってしまい、戸惑わせてしまった場面もあった。反省点は多いが、そこから学べることも多かったため、この役務を任せてくれたクルーに感謝したい。

次にロケットストーブについてである。ロケットストーブは、私がボーイスカウト以外の活動で出会った方々と触れ合う中で知り、その魅力を感じたものであった。それだけではなく、ロケットストーブという概念自体が発展途上国での煙害等健康への悪影響を減減するために生まれたものであるから、きっと国際協力を考えていく上でも重要となってくるものだという自信をもって今回のプロジェクトへと提案した。結論から述べると、成功したといえるだろう。なぜならば、現地の村人(ほとんどが女性)からの興味関心を引くことができ、実際に家で使用する場合の質問も多く受け付けられたからである。プログラムとしては構造と理念の説明、そして実演という流れで実施し、数は多くないが実際に村人にもレンガでロケットストーブを作成してもらうこともできた。しかし、成功したといえるのは2日目のおかげでもある。ブースデモンストレーション初日が終わった後の評価反省を行い、反省点と現状からより効果の高いプログラム展開へと改善し、実施できたことが成功につながった。実際に理解しながらレンガを積んでいく姿や前のめりで話を聞いてくれる姿を見たときは、「頑張っ準備と改善をしてきてよかったなあ」と心から思った。洪水が多く過疎な小屋での煮炊きが多いこのエリアで、実際にロケットストーブが普及できればきっとプライマリーヘルスケアの向上につながるはずだ。自己評価として派遣団のミッションと照らし合わせると、連日議論やフォローをしあったことで「みんなで助け合い」、現地の文化風土を理解したプログラム展開と日本文化の紹介によって「お互いの文化を知り、日本を伝える」ことができ、役務や責任感に基づいて行動したことで「責任を果たして成長」し、そして何事にも「挑戦し、よりよくする」ことができた。このプロジェクトが折り返し3か年も発展し続け、また私たちもこの経験をこれから先自分たちの船を自分たちで漕いでいくことができるように昇華していきたい。

最後に先に述べた謝辞に加えて、要所においてアドバイスを頂いた青木派遣団長と日本派遣団クルーメンバー全員に感謝したい。ありがとう！！



茨城県連盟日立第5団

助川 菜々子(記録担当)

私がこの派遣に参加しようと思ったきっかけは中学の頃から抱いてきた国際協力にかかわりたいという夢の実現のために、今大学で学んでいることをどのように現場で活かしていくのか、またローバースカウトとしてこれからどのように活動していくのかを考えるチャンスだと思ったからだ。

独特の文化が根付いているバングラデシュ。日本人にはとても渡れないほど渋滞した道路、行く先々で多く見かける大量のゴミ、綺麗とは言えない水。私達がすむ日本とはかけ離れた生活を送るバングラディッシュの人々。しかしその笑顔は今でも忘れられない程素敵だった。正直なところ私達に出来ることがあるのだろうかという思いもあった。

しかし、ブースデモンストレーションでけん玉とコマで遊んでさらに笑顔になる子供達、ハウス・トゥ・ハウスで私達が贈ったサンダルを履いて喜ぶ村の方々、真面目に洗濯の方法を学ぶ女性たちを見ていると、私達にも出来ることがあるという気持ちが湧いてきた。バングラデシュの人々は子供も大人も本当に明るく、温かい。日本の視点から見るバングラデシュはどうしても途上国としてのイメージが大きくなってしまふ。しかし、学校の授業では学べない日本とバングラデシュの良い面での違いを学べた。このプログラムはこれからの自分の将来に大きく繋がったと感じる。

それぞれ母国語が違う台湾、日本、韓国、バングラデシュという4つの国がスカウトという繋がりと同じ空間にいて、コミュニケーションをとっているという環境の中に10日間置かれ、本当に多くの事を学んだ。英語にあまり自信はなかったが、帰国した今でも毎日のように連絡を取る仲間を得た。またこの派遣を通じて同じスカウトとしてそれぞれの国での活動を知り自分の活動の範囲が自分の県から全国、そして世界に広がって行くのを感じた。

推薦、応援して下さい下さった自団や県連の方々、多くのアドバイスを下さった派遣団長、個性豊かで意識の高い素晴らしいクルーメンバーに本当に感謝し、この派遣を通して学んだ事を伝え、またこれからの活動に活かしていきたい。



栃木県連盟宇都宮第15団

保田 恵里香(装備担当)

今回の平成27年度CJKBプロジェクト・バングラデシュ派遣は、私にとって、ボーイスカウト活動で国外に出て行く、初めての海外派遣でした。また、バングラデシュという国も、当初は詳細もよく分からず、曖昧なイメージしかないという状況の私には、この派遣は大きな挑戦であり、また今後のボーイスカウトの活動指針になりうるものでした。

私はこの派遣で装備担当を任せられ、備品管理の他、ロゴマークの作成という派遣のシンボルに関わる活動ができました。

これまで、絵が好きだという自分の得意分野をなかなかボーイスカウトに生かすことが出来ずにいた自分にとって、やりがいを感じられる任務でした。

実際は、デザインの案から構成、配色、そして交換品としてグッズの発注と、限られた期間内では忙しく、クルーたちの協力もあり、無事ロゴマーク完成にたどりつけました。

はじめてのデザインは戸惑い、自分自身の力量ゆえの粗さも残り、不安だったのですが、クルーやCKBの海外スカウトにも気にいってもらえ、充実感がありました。特に、ロゴマークの各国の国花のモチーフが海外スカウトに喜ばれ、同時におせちといった日本文化を紹介する話題提供のいいきっかけになれたことはとても嬉しく思いました。

初めての海外派遣、初めての南アジア、初めての自己の得意分野を生かせる活動、たくさんの「初めて」を経験した派遣中は、毎日が新鮮でした。国もばらばらの人が同じものを見て感じて、同じタイミングで笑ったり、泣いたりする日々は、国境を越えた活動で人の本質として万国共通の普遍性が感じられました。自分はホームステイなど、ボーイスカウトを除けば多くの国を訪れたことはありますが、涙ながらに別れを惜しんだのはこれが久しぶりで、人の優しさに触れた旅として、自分の中でもかなり大切な旅でした。

この派遣中は自己の英語の未熟さ、体調管理の甘さといった課題に気づけたのでこれらを次に活かせるようにしたいと思います。また、これらを通し、後輩の育成と地域のローバー活動の活性化につなげたいと思います。



埼玉県連盟さいたま第8団

大竹 敏生(会計担当)

本派遣に応募した動機は、日本連盟の派遣に参加したいと同時に発展途上国のインフラ整備状況を知りたかったからである。私は大学で土木工学を専攻しているため、元々バングラデシュの水問題には非常に興味があった。また世界ジャンボリーの経験がなかったため、世界のスカウトと交流してみたいという思いも持っていた。

派遣に際して、致死感染症の予防接種を全て打って準備万端だろうと安心していた。しかし、現地で38.5°Cの発熱、帰国後に頭痛と体のだるさに悩まされた。後日の検査で、軽度の感染症と発覚し、環境の変化による健康管理の難しさを痛感した。

今まで自分は海外旅行の経験がなく、右も左もわからなかった。にもかかわらず会計という責任重大な仕事を担当し、換金の難しさを体感した。羽田空港からは未知の経験ばかりで、全てが新鮮だった。機内泊は寝られず、長いトランジットは眠く、疲れを溜めたままダッカに到着した。空港に到着後、“湿気のある暑さ”と“人の多さ”には驚いた。車移動中では、急な車線変更・クラクションの応酬・線路歩行・道路のゴミ・横断歩道の凸凹など日本ではありえない不思議な体験の連続であった。またダッカからシャリアプールの移動では、バスごと船に乗り川を渡る経験もできた。

派遣員のテンションの高さには、ついていくのがやっと。台湾や韓国のスカウトからは、たくさんの手遊びやゲームを習った。その全てが目から鱗だった。そして日本の有名な曲は、即興で歌えるようにしておくべきだった。

辛かったことは、食事と入浴だった。ごはんは辛いものはとことん辛く、甘いものはとことん甘い。また涼しい夜に水のシャワーは、風呂大好きな自分は耐え難いものであった。

この派遣では英語でコミュニケーションをとるが、とにかく相手に気持ちを伝えようとする熱意が大事であると感じた。つまり高度な会話能力がなくても、正直何とかなる。更に言えば、指差しベンガルを使うことで村人とかなり交流ができた。バングラデシュのスカウトは、日本人に気兼ねなく話してくれる。というのも、かなり日本に興味があるスカウトが多いと思った。

この派遣を終えて、バングラデシュの国のイメージが変わった。人々の笑顔が本当に素晴らしい国で、私にとって彼らの笑顔が「最高の贈り物」であった。現地の方々との交流が一番心に残った。またスカウトの地位が本当に高く、社会に認められており、私たちの歓迎と歓送のもてなしは想像を遥かに超えていた。これを契機にいろいろな国を自分の目で見たくなった同時に、世界の人々に役立つ仕事に携わりたくなった。

意識の高いメンバーにも恵まれ、集会やプログラムが楽しく、無事に全員帰国できた。今まで支援してくださった方々、ありがとうございました。最後にシークレット・パルというこの派遣だからこそ面白い企画をはじめ、〇〇ナイト(各国の出し物)など、感動的な体験を味わえる企画が目白押しだった。そしてまた、バングラデシュに行きたくなる。機会があれば是非、一度この派遣に参加してみてください。きっと人生観が180°変わるはず!!



東京連盟東村山第6団

仙田 雅大(プログラム担当)

今回の派遣が私にとって初めてのボーイスカウトでの海外派遣でした。

過年度参加者にこの派遣の面白さや魅力等を聞いていたことにくわえ、SNSを通じて事前にバングラデシュのスカウトをはじめ、台湾や韓国のスカウトと連絡を取っていました。派遣が近づくにつれ、文字でしかやり取りしていなかった人々と顔を合わせられるということに胸を躍らせていました。しかし同時に現地の状況が分からないことや英語に対する不安は抱えていました。

実際にバングラデシュを訪れると、今まで悩んでいたことなどすっかり忘れてしまうくらいに充実した日々を送れました。バングラデシュのスカウトは私たちを手厚く受け入れてくれたし、自分の拙い英語でも理解しようと努めてくれて、その期待に応えるため自分も必死で言葉を発しました。

自分は英語に関して勉強したりという準備をあえてしませんでした。ある程度勉強しただけでは帰国した際、勉強不足を痛感することは明白だったからです。むしろ少し勉強しただけ後悔は強いと思いました。英語とはしょせん道具です、コミュニケーションの手段はなにも英語だけに限りません。自分は大学でダンスをかじっていたこともあり、その経験を生かして交流しました。体を使った交流は受け入れやすかったようで、すぐに名前を憶えてもらえました。

また自分は宗教に関して誤解していることにも気づかされました。自分の知識は浅はかで独善的で偏見まみれでした。イスラム教の女性は顔を覆っていて結婚した男以外は触れてはいけないものと思い込んでいました。これは大きな間違いです。いかなる国籍であろうとどんな信仰があっても、同じ血の通った人間なのです。楽しいことがあれば笑うし、からかわれれば怒るし、別れが訪れるとさみしいのです。心が通じればふれあいたいのです。こんな簡単なことを教えてくれたのは、一人の少女です。

教科書は生きる上で大事なことを教えてくれるので学校での勉強は大事です。しかし人生を楽しむためには教科書に縛られない学びのほうが大切です。自分はこの派遣に参加することで数多くの先生と出会うことが出来ました。彼らから学べることは私の人生を確実に豊かにしてくれます。教わることもたくさんありますが、知ってほしいこともたくさんあります。そのためには教科書に基づく勉強をしなければなりません、頑張ります。

最後に私がこの派遣に参加するにあたって支えてくださったボーイスカウト関係者の皆さまをはじめとして、話を聞かせてくれた青年海外協力隊の方、そして家族。迷惑かけた分これからの活動で還元したいと思います。本当にありがとうございました。

そして苦楽を共にした日本派遣団の皆さま、

あなた方は最高です。言葉で言い表せられ

ないくらい感謝しております。

Dhonnobad!!



東京連盟中野第8団 沼上 志帆(広報担当)

私は国際交流と外国に行く事が好きなので今回の派遣に応募しました。そして今回の派遣は私にとって初めてのアジア渡航でした。アジア最貧国といわれるバングラデシュは日本との違いをあげたら切りがないほどのカルチャーショックでした。派遣前に「危ないよ」という人もいましたが、実際行ってみたら街を歩くことに少し恐怖はありましたが、危ないということはなくバングラデシュという国のイメージが変わりました。百聞は一見に如かずとはこのことだなと思いました。台湾、韓国のスカウトは日本について知っていることが多く、バングラデシュのスカウトは日本についてすごく興味を持ってきてくれました。私は国際交流が好きで楽しんでいるのに何も知らないし、日本について何も伝えられなかったなと思いました。そして、日本以外の国々と比べるとやはり日本人の英語は下手だけれども伝えようとしてくれることと理解しようとしてくれる優しさをとても感じました。そのおかげでみんなとつたない英語だったけれどもたくさんのコミュニケーションがとることができてとても楽しかったです。英語を共通言語として難しい単語がでてきたときにそれぞれが辞書を使って母語に直しているのを見て面白いなと思うながら言葉の違いを感じました。ベンガル語を教わったり、日本語を教えたりしました。英語ができなくても気持ちは伝わるし、楽しいことは一緒だなと思いました。

ハウストゥハウスでは村の様子を知ることができてとても新鮮でした。スマホを持っている人がいる横で靴を履いてない人がいたりして、もっと伝えるべきことや技術がたくさんあるなと思いました。また、村や行く先々でも歓迎されてとても嬉しかったです。

ブースデモンストレーションでは私はカルチャーブースでコマの紹介を担当しました。バングラデシュにもコマのような物があるということでまわせる人も多く驚きました。苦しい生活をしていると勝手に思い込んでいった村の子供たちは楽しそうな笑顔で、村の子供たちが習った英語を使いたくて話しかけてくるのがとても可愛かったです。

辛い物はとことん辛い、甘いものはとことん甘いため食が合わない水は危ない、テピカジェルと除菌シートがないと生きていけないなど日本人には過酷な環境でしたがお腹が痛くなる以外の大きな病気やケガもなく過ごせてよかったです。

別れ際のみみんなの涙、自分の涙は忘れられない思い出となり、バングラデシュでの時間がとてもかけがえのない時間を過ごせたということをも物語っていてとても素晴らしい経験ができたなと思いました。「Don't cry」と言ってくれるバングラデシュのスカウトの優しさにさらに泣けました。ジャンボリーなどでできた友達はその場では一緒に楽しむことができるけれどその後の関わりがある人は少ないが今回できた友達は連絡を取り続けようと言ってきて、実際に連絡をとっているのでも今後も仲良くしたいと思っています。とても優しくしてくれたセリム、同じ班でとても仲良くしてくれたジャンナットとアリフ、コマの説明を訳してもらったイスラム、旅行で来るならプランを立てるよと言ってくれたアリフ、除菌シートで拭いたブドウを口入れた時の「薬!？」と言ったムムの反応は忘れられません。また彼らに会いに台湾、韓国、バングラデシュに行きたいです。



鳥取県連盟鳥取第11団 古川 ゆり（レクリエーション担当）

私は今回の平成27年度CJKプロジェクトバングラデシュ派遣が初めての海外派遣でした。CJKプロジェクトバングラデシュ派遣のことは2年前にボーイスカウト日本連盟のホームページを見て興味を持っていました。しかし、富士スカウトでもなく、英語能力が高いわけでもない自分が海外派遣に参加していいのだろうか。と思い、今までは応募することを躊躇していました。派遣団のみんなの足を引っ張るのではないか、なんの役にも立たないのではと不安に思うことがたくさんありました。けれど、素晴らしい仲間にも恵まれた分の役割をきちんと果たすことが出来たと感じています。

私はもともとアジアの国が好きで個人的に旅行にもいっていました。なので、バングラデシュには初めて行くけれどそれほど街並みの違いに驚くことはないだろうと思っていました。しかし、バングラデシュには本当にたくさんの方がいて驚きました。どこをみても人がいて、エネルギーに満ち溢れているように感じました。驚くこと、楽しかったことなどたくさんありますが、私がとくに心に残ったことは2つあります。

1つはバングラデシュの子供の笑顔です。ハウストウハウスキャンペーンの時私たちはブースデモンストレーションの宣伝をベンガル語で言いながら家を回りました。そのときアキちゃんとシウリちゃんという2人の女の子がずっと一緒についてきてくれ、ベンガル語の説明を手伝ってくれました。その2人は、翌日のブースデモンストレーションにも来て、「ユリ」と何度も私の名前を笑顔で呼んでくれました。初めてみる外国人に興味津々で覚えてた英語を使って瞳をキラキラさせながら話しかけてきた彼女たちの笑顔を忘れることが出来ません。

もう1つはバングラデシュスカウトや村の人のおもてなしの心です。私はおもてなしというと、日本人特有のものだ。と思っているところがありました。しかし、それはとても傲慢だと思うぐらい、バングラデシュのスカウトや村の人は素晴らしいおもてなしの心を持っていました。台湾・日本・韓国にいい部屋を貸してくれ、バングラデシュのスカウトは狭い部屋を何も言わずに使っていたことを知った時、村の人が大切に育てているお花をちぎってくれた時、素晴らしいオープニングセレモニーを準備してくれていた時、様々な場面で彼らの心配りに感動し、助けられました。

本派遣に参加して観光を目的とした旅行では知ることが出来なかったものをたくさん得る事が出来ました。自分が得たことをたくさんの人に伝えていきたいです。



岡山連盟岡山第17団

溝部 光優(プログラム担当)

この平成27年度CJKプロジェクトバングラデシュ派遣は自分にとって初めての海外派遣であるとともに初めての海外への渡航でした。飛行機の乗り方さえ分からず、さらに初日から体調を崩すなど他の派遣員にはたくさんの迷惑を掛けてしまいました。あらゆる意味で多くの経験を得ることのできた派遣だったと思います。

ダッカに到着してすぐに日本とは全く異なる環境に驚かされました。

空気、人、交通、建物、文化、あらゆるものが自分にとって新鮮で且つ、想像を超えていて自分が日本といういかに狭い世界しか見ていなかったかということを感じ知らされました。

実際に現地の人にふれあえるハウストウハウスキャンペーンやブースデモンストレーションでは現地の生活を自分の目で見ることができテレビなどのメディアで見るとは違う本当の意味での理解、他国の文化を身をもって体験できる国際交流、野良犬に靴を盗られるなどといった日本では決して味わうことのできない貴重な経験をこの派遣は自分に与えてくれたと思います。

特に印象に残っているのがバングラデシュの人々についてです。彼らは非常にフレンドリーで優しく親切でいつも声をかけてきてくれました。その中でも彼らの笑顔は本当に美しくこれ程までに純粋で澄んだ笑顔を見たのは初めてで、今でも目を閉じると脳裏に浮かんでくる程で、こんなにきれいな心を持った人たちを最近の日本で見たらどうかとさえ思いました。また別れ際には皆が涙を流して自分たちを見送ってくれ短期間でありながらここまで自分たちとの別れを惜しんでくれる彼らに本当に感動し、こちらも自然と涙を浮かべてしまったことを覚えています。

この派遣を通してもともとある知識を実際の経験に変えることがいかに大切なことであるかを改めて感じさせられました。派遣前までのバングラデシュのイメージと派遣後のイメージは全く変わったと思います。普段の生活で得ることのできる情報・知識と実際に照らし合わせることでまだ極一部ではあると思いますが本質や事実を身をもって知ることができたと思います。今後とも多くの経験を積んでいくにあたり、物事の知識だけがすべてであるとはとらえるのではなく広い視野をもって活動に取り組んでいきたいと思っています。



山口県連盟岩国第1団

神尾 尚(生活担当)

私は第22回世界スカウトジャンボリーである人に出会ってなかったら、この派遣の存在自体知らなかったと思います。その人と出会い、RCJフォーラム2015に誘われて初めてこの派遣の存在を知りました。知った当時はあまり興味がなかったのですが、RCJフォーラム2015のお疲れさま会に参加させてもらったさいに、バングラデシュ派遣の先輩である方に、ボーイスカウト最高のプロジェクトで25万円以上の価値があるといわれ、もう一人の社会人の方に社会人になったら行きたくてもいけなと言われてました。この様な契機があり、せっかく時間のある大学生ですし、春休みバイトで終わるのが非常にもったいないと思いこの派遣に参加させていただきました。以上が主な参加理由です。もちろんほかにも、異文化交流、発展途上国を直接見たいと思ったことも参加理由の1つです。そのような些細な理由で参加しましたが、この派遣を通して、私のボーイスカウトに対する考え方、バングラデシュに対する思い、国際交流の楽しさ重要さ等を知ることが出来ました。さらに、私がやりたいこと、やるべきことを明確にしてくれました。そのくらい、この派遣には感謝していますし、これから参加される皆さんに是非引き継いでもらいたいです。

私はこの派遣中、部屋のベッドの個数の関係で一人だけ台湾のスカウトと一緒に過ごすことになりました。要するに、部屋に帰って日本語を話せられる環境じゃなくなったわけです。しかし、この環境が私を成長させてくれました。がむしゃらにでも英語で必死にしゃべる意識が作られたのは、自分の中で非常に大きいです。また、台湾のスカウトもゆっくり、丁寧に話しかけてくれました。そうこうしているうちに、いつの間にか気軽にしゃべれる友達になっていましたし、自分の思ったことを伝わっているかどうかは別として、発言できるようになっていました。このような経験を通して、もっと多くの人としゃべられるよう努力したいとも思いました。

村に到着して、本当にバングラデシュの人って人懐っこいんだなあと思いました。自分たちが彼らにとって珍しい存在だったのはもちろんですが、挨拶したら笑顔で答えてくれるし、目が合っただけでも、笑顔でした。アジア最貧国と言われていますが、村人たちはその場で毎日楽しく生活していました。自分たちが彼らを助けるという意識で行動するのも大切なのでしょうが、彼らには彼らの生活がありその場で生活しています。無理に自分たちの技術を伝えるのではなく、彼らのライフスタイルを尊重し、彼らが必要としているものを提供していくことが一番大事だと感じました。みんなが笑顔で生活できている、いまの環境を大事にしてほしいと思いました。

この派遣中、私は様々な呼び名で呼ばれました。中からはあけられない部屋のトイレの中に人が入っているのに気づかずに鍵を閉め、中にいた台湾のスカウトを閉じ込めてしまいました。さらに台湾のスカウトに鍵をくれといわれたので鍵をわたしたのはいいのですが、なぜか部屋があかなかったのです。実は自分の家の鍵を渡していました。これらのことを、公に公開する台湾のスカウトだったので、これらの話はすぐに広まり、つけられた名前がプロブレム・ボーイでした。この呼び名は主にバングラデシュのスカウトが使っていたように思います。また、私たちの国際班はビッグ・チームと名付けられました。理由は知りませんが、台湾、韓国のスカウトがこれでいいんじゃないかというノリで決まりました。ハウステウハウスキャンペーンのプログラムをビッグ・チームで行っていると、これも理由はわかりませんが、韓国のスカウトが自分のことをビッグ・ボーイと呼びだしたのです。ご予想はつくと思いますが、それ以降国際班(ビッグ・チーム)のメンバーからはビッグ・ボーイと呼ばれていました。あと、生活担当で食事前に除菌ペーパーを配っていたら、バングラデシュのリーダー的存在の人たちからはティッシュ・ボーイとよばれましたし、バングラデシュナイトであまりの眠さでバングラデシュの来賓の前でうとうととしてしまったので、来賓からはスリーピング・ボーイと呼ばれました。本当に失礼なことや、ささいな事件をこの派遣中にたくさん起こしてしまいました。日本なら、自分は怒られ続け、メンタル崩壊しているところなのかもしれませんが、お国柄というか、なんといいかわからないですが、これがバングラデシュなんですね。

さらに、いままでの海外派遣の中で最も重い罪深きことを私はしてしまいました。それは、海外保険に入っていなかったということです。そのため、高額なお金を貢いでもらい国際電話を使うという、非常に貴重な経験をさせてもらった一方、非常に迷惑なことをしてしまいました。これはものすごく反省します。今後は、書類が来たらその日のうちに処理するようにします。

最後になりますが、この派遣によって私の今後の人生は、いえ未来は変わりました。そのくらい自分にとって大きく、そして重要な出来事でした。次年度以降のみなさん、是非参加してみてください。英語が喋られない、辛いものが食べられない、シャイ、体が弱い等この派遣を躊躇してしまうかもしれない理由はたくさんあるかもしれませんが、しかし、人生はたった一度です。やらなくて後悔するより、やって後悔してください。それと、これは自論ですが、どんなつらい状況でも無理やり楽しいと思って行動すれば、いつの間にか楽しくなっています。やはり、人間楽しんでこそ生まれてよかったと思うのではないのでしょうか。準備は確実にしていったのに予定通り進まないときにどれだけその場を楽しめるかがこの派遣のカギになると思います。

次年度の派遣員が参加してよかったといってもらえるよう、私たちはサポートしますので迷っているみなさん是非是非参加してみてください。

本当の最後になりますが、この最高かつかけがえのない派遣員のみなさん、適切なアドバイスをしてくださった派遣団長、つねにサポートしてくださった日本連盟国際部の職員の方、一生の友達になるであろうこの派遣で出会った韓国、台湾、バングラデシュのみなさん、これまでそだててくれたすべての方に感謝の気持ちをこめて弥栄をおくります。

弥栄、弥栄、弥栄



長野県連盟松本第6団

派遣団長 青木 秀樹

はじめに、この大役を無事果たせたことは正直ホッとしています。

派遣先のバングラデシュは行ったことがないし、周りの人に聞くと心配する人もいて、大変な状況も予測され大丈夫かなと思いつつお引き受けしました。

反面、派遣先や衛生面での不安はあるものの、今回のような少人数のプロジェクト活動はとても興味がありましたので、どんなチームをつくるか楽しみでもありました。

事前訓練がスタートすると、10人のスカウトはひとり一人が个性的で、クルーリーダーのリーダーシップとキャラクターの違いからも徐々に素晴らしいチームが出来上がってゆきました。

そんな中で、我々はバングラデシュに台湾・日本・韓国で何ができるのか、サーベイからのソリューションを想定する難しさも知り、つかみ所のないプロジェクト展開を考え実行する絶好の機会になったとも思います。

実際のところは、バングラ側で用意した企画を4ヶ国が一緒に実施することで、受け入れ側の意図する活動の一助を担う形になったのですが、はじめての経験からは多くの学びがあったことは事実です。

今回の派遣でスカウトがそれぞれに受取ったものは違うと思いますが、貧しいけれど人なつこい子ども達のキラキラした眼差しを受け、心が震えない人はいなかったと思います。ある意味で提供できることの限界を感じつつ、生きること、人としての大切なことを発見する機会になったことでしょう。

この派遣を通じ視野を広げ、心と物のあり方を知り、発展途上国に何ができるか考えたことは今後の人生において得難い経験だと思います。

今回のメンバーがやり遂げた達成感と連帯感はこのプロジェクトだからこそ喜びだと思います。みんないい顔をしていました。

最後にこのプロジェクトに関わった全てのみなさまにお礼を申し上げ所感とさせていただきます。

有難うございました。









公益財団法人

ボーイスカウト日本連盟

SCOUT ASSOCIATION OF JAPAN

住所 〒113-8517 東京都文京区本郷1-34-3

電話 03-5805-2561 (代表)

ファクシミリ 03-5805-2901 (代表)

URL <http://www.scout.or.jp/>

2016年3月発行